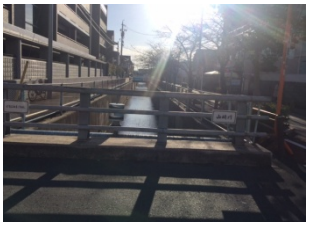
山崎川をゆく

よく利用する名古屋・本山の「コープあいち」前を流れている山崎川は、すぐに暗渠に入り、交差点から猫ヶ洞通りでは見えなくなる。写真は本山の「コープあいち」前の山崎川。以前「郡道をゆく」を何回かレポートしたが、なにかと馴染みのある山崎川についても書きしるしていきたい。



これも馴染みの『瑞穂区誌』に山崎川の歴史が書かれていたのを思い起こした。まずは山崎川の歴史から。

山崎川は、名古屋の東部丘陵と名古屋台地の水を集め、瑞穂区を縦貫して伊勢湾に注いでいる。縄文時代（約 1 万～2000 年前）には、現在の瑞穂運動場あたりで海に流れ込んでいたが、その後、海面の低下と土砂の堆積で河口は少しずつ南に下がっていった。平安時代には新瑞橋付近が河口と推定されている。江戸時代『張州府志』には「井戸田村の東にあって、源は末森村、伊勝村に出ず、河（川）名村に至って、河名川といい、石仏村、新屋敷村、井戸田村を経て、山崎村に至り、南に流れて海に入る」とある。元禄 14 年（1701）完成の巾着（きんちゃく）新田（現呼続大橋下流右岸）をはじめ新田の開発がすすむと、山崎川は海面を残すかたちで人工的に延長されていった。そのころの川筋は、現在の祐竹（ゆうちく）橋（南区繰出町）付近から西流していたが、江戸末期に道徳前新田と加福新田の間の入江に付け替えられてさらに南に下がった。明治時代に入ると河口付近は工業地帯造成の埋め立てがすすみ、明治 43 年（1910）に五号地が、大正 9 年（1920）に対岸の六号地ができると山崎川はほぼ現在の姿となり、全長 13.6km の河川（2 級）ができあがった。

山崎川は、上流では「石川」、川名村（現昭和区）あたりでは「川名川」（河名川，川菜川）、下流の山崎村（現南区北部）あたりでは「山崎川」とよばれ、匏（ひさご）川、諸根川の別名もあった。江戸時代には現在の師長（もろなが）橋（土市町）の上流まで舟が上ってきたといい、大正時代に入っても山崎橋（河岸町 4 丁目）付近まで舟が出入りし、酒や薪を運搬していた。また、河岸にはいくつもの水車が設けられて製粉などに使われており、のどかな田園風景が広がっていた。

山崎川は古くから勝景・行楽の地として知られてもいた。中流の壇渓（だんけい）は白林寺の住職壇渓和尚が隠棲した地と伝えられ、『尾張名所図会』では「深淵なり‥‥土橋を架し、樋を伏せて幽すいいふばかりなり‥‥小仙境といふべし」とたたえられている。また、

『鸚鵡籠中記（おうむろうちゅうき）』の筆者朝日文左衛門も山崎川へしばしば投網を打ちに訪れ、はや、うなぎ、あゆなどを獲ったと記している。現在名所として親しまれている桜は、昭和 3 年（1928）に耕地整理組合によって植えられ、第二次大戦後は花見でにぎわうようになり、一時は河岸に茶屋や屋台が並んだこともあった。

山崎川は、近年にいたるまできれいな水質が保たれ、醸造用水にも使われるほどであった。大正初期までは新端橋付近までシラスが上ってきたといわれ、フナやシジミもとれ、とくにシジミは「山崎蜆（しじみ）」といわれ有名であった。しかし、昭和に入って流域の開発がすすむと排水などにより水質は悪化、昭和 38 年（1963）ごろは、新瑞橋下あたりは悪臭のする水がよどみ、大きなドブ川といった状態にあった。その後、下水道の改善、汚染防止の努力がはらわれたため水質が好転しはじめ、昭和 45 年（1970）ごろからは、魚の姿も見られるようになってきている。

（2017 年 3 月 5 日）